

チュニジア南東部のオリーブ生業とその意味*

二ツ山 達朗**

1. 本報告の目的及び対象地域の概要

筆者はチュニジア南東部の乾燥地帯で、人々のあいだに根差す宗教的風習や民間信仰を研究対象としている。チュニジア南東部では、後述するようにオリーブ栽培に関する生業が古くから行われており、それらは彼らの民間信仰と少なからず関係する。この報告内容もフィールド調査により得られたデータから、同地域においてオリーブが生活の中でどのような役割を持ち、どのような意味を持つ存在であるか、そのような考察がどのような意義を持つのかを述べる。

調査対象地域はチュニジアで最も南に位置するタタウィン県で、その中でもシェニニ村と呼ばれるベルベル人(ジュベリーヤ)の村¹⁾に住み込んで、参与観察とインフォーマルインタビューを行った(写真1)。この村を選んだ理由は、後述するように古くからオリーブを中心とした生業が行われており、今でも伝統的な農法やオリーブオイル精製がなされているからである。

自然環境は年間降水量100～200mmの乾燥地帯で、標高400m前後のDemmerと呼ばれる山々が連なり、土壌は石灰岩、泥土、礫などが占める²⁾。そのような自然環境下では耕作地と、そこで栽培できる作物は極端に限定され、ジュベリーヤたちはオリーブやナツメヤシ、イチジク、雨が降れば麦などをはじめとした穀物の栽培を行ってきた³⁾。その中でも中心となるのがオリーブ栽培であり⁴⁾、ここではオリーブをめぐる生業をとりあげる。



写真1 村の外観

2. オリーブをめぐる生業・在来知

上述のように樹木が自生することが難しい沙漠気候の環境下ではあるが、山岳地帯の環境を効率的に利用する彼らの在来知によって、オリーブ栽培が可能となっている。例えば、彼らは山岳地帯の起伏を利用して、その谷底に沖積土を確保し、雨が降れば水が溜まるJsurと呼ばれる堰をつくってきた⁵⁾。この設備によってオリーブなどの樹木が育成できる土壌と水源を確保している(写真2)。

* 本報告は大学院教育改革支援プログラム「教育と実務を架橋するフィールドスクール」による支援で可能となった海外派遣に関する成果の一部である。

** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 「ベルベル」については、宮治がアマジグ(自由な人を意味する)という呼称を提唱しているが(宮治美江子 2010「ベルベル人と呼ばれて」鷹木恵子(編)『チュニジアを知るための60章』明石書店)、堀内は「ベルベル」という呼称の有用性を述べており(堀内正樹 2006『中東』明石書店)、どちらの語を使用するかはいまだに統一されておらず、研究者による。調査対象地域では「山に住むベルベル人」のことを呼ぶ際に、Jabaly(アラビア語のJabalから派生し、山に住む人を意味する)という呼称が一般的に使われている。

2) Nizar, Y. 2003. *Les Ksour; une vision d'avenir*. Tunis: Univercité 7 Novembre à Carthage, p. 23.

3) Zaïed, A. 2006. *Le monde des ksours du sud Tunisien*. Tunis: Centre de publication universitaire, pp. 5-7.

4) Louis, A. 1975. *Tunisie du Sud; Ksars et villages de Crêtes*. Paris: Editions du Centre National de la Recherche Scientifique, pp. 19-20.

5) 高さ1m～1.5mほどの壁を石や土でつくりあげ、谷間を堰きとめることで、そのダムの内側に土壌を確保し、

この地域ではフェニキア時代からオリーブ栽培が始まり、接木などの農耕技術やオイル精製技術はローマから影響を受けたとされている⁶⁾。その時代からオリーブ栽培がされてきたことは住民たちによっても語られることもあり、後述するように人によってはオリーブは死なない木であると認識されているため、大木を指して「ローマ時代から生きている木だ」と述べる人もいる。オリーブオイルはこの地域の歴史的特産品であり価値の高い交易品として、遊牧民を介してアフリカの近隣諸国にもたらされた⁷⁾。



写真2 村から20kmほど離れた砂漠の中にまで Jsour とオリーブ畑が続く



写真3 オリーブの苗を植え、ナツメヤシの葉で保護網をつくる

現在でもこの地域の住民の基本的収入源であり、全ての家庭は数本から数百本にいたるまで村の周辺の Jsour にオリーブの木を持っている⁸⁾。彼らの生活はオリーブ農事と深く関係しており、12月から3月ごろの農繁期には家族ぐるみで収穫が行われるが、今回の調査期間は10月だったために、倉庫に保存されている実をオイルに精製する作業、苗植え（写真3）、死んだ幹を炭に変える作業を参与観察した。

村でのオリーブの用途は多岐に渡っており、後の考察とも深く関係するので、その利用方法を概

観しておく。木の幹は他の木に比べて強度が高いため、建築資材や農機具の資材として使われる他、枯れた幹や枝は土で密閉空間をつくる *Marduma* という技法で炭に変えられて村や市場で売られる⁹⁾（写真4）。実は塩漬けにして食される他、ほとんどはオリーブオイルに精製される。オイルを絞った後に残る水分は石鹼に、固形の搾りかすは家畜の餌にされるなど、全ての部位があますことなく使われる。



写真4 土の中の密閉空間から炭を取り出す作業

流出するのを防ぐと同時に、雨が降った時には谷間に集まる水を堰内に溜めるための設備。この設備によって年間降水量 500mm の地域と同じ水量が確保できるという試算もある。Ouezdou, H. 2001. *Découvrir la Tunisie du Sud: De Matmata à Tataouine*. Tunis: Faculté des sciences humaines et sociales de Tunis.

- 6) Zaïed, A. 2006. *Le monde des ksours du sud Tunisien*. Tunis: Centre de publication universitaire, pp. 132–138.
- 7) Zaïed, A. 2006. *Le monde des ksours du sud Tunisien*. Tunis: Centre de publication universitaire, pp. 133, 145.
- 8) この地域での農業生産物はオリーブだけでなく、イチジクやナツメヤシ、大麦などの穀物も栽培されているが、前述したように中心的な農作物はオリーブである。なお、栽培されている種類は4種。タタウィン県で昔から作られてきたのは乾燥に強い *Simleli* であるが、最近では農法の変化により *Zormati* が増えつつある。
- 9) タタウィン県では調査時にオリーブの炭が約 1.2DT / kg なのに対して、他の木の炭は約 0.8DT / DT であり、オリーブ製の炭は他のものに比べて 1.5 倍の値で取引されている。DT: ディナールチュニジアン (1DT = 約 56.5 円、2011 年 1 月 9 日)。

オリーブオイルは毎日の料理に食用として使われる他、少なくなってきたはいるがランプ用の燃料としても使用される。また、それだけでなく薬として使われると説明する人が多い。オイルを身体につけてマッサージすると関節痛に効いたり、ある種類のオイルは頭痛や喉の痛みにも効いたりと言われる。美容のために肌や髪に塗ることも日常的に行われる。チュニジア文学研究者である Zaïed は、この地域に関する記述の中で、オイルが薬として使われていることにふれ、あらゆる病気から身体を守り健康を与えてくれるものとして、Mythe(神話)とも Le liquide divin(神の液体)とも形容している¹⁰⁾。

Zaïed がオイルを神の液体と評したように、実際にこの地域では宗教行事とも無縁ではなく、聖者参詣などの宗教行事や農祭事の際に使われる Bsiysa¹¹⁾ にオイルは欠かせないものであるし、聖者が死んだとされる場所など、聖者ゆかりの地にオイルが注がれることもある¹²⁾。

3. オリーブとオリーブオイルの意味

前節では、対象地域の人々にとってオリーブが生活の細部に至るまで必要不可欠な存在であり、時には宗教行事とも関連し、単なる物質以上の意味を持つことを示した。ここでは実際に彼らにとってオリーブやオリーブオイルはどのような意味を持ち、どのようなイメージを想起させるものであるのか、フィールドでの聞き取り調査から提示する。

住民との会話の中で、オリーブはどのようなものかという筆者からの問いかけに対して、村人の返答は、次のような言葉で説明された。アラビア語:khāṣṣa(特別な)、hāmm(大切な)、mubarak(恩恵のある)、raḥma(慈悲)、muqaddas(神聖な)、malika(女王)、ṣalāḥ(役立つ・健康な)。フランス語:vital(生命の・生存のために不可欠な・非常に重要な)、symbole de la vie(生活のシンボル)、comme les enfants(子供のよう)。

またそれは行為として現れるのか、現れるのであればどのように現れるのかという問いに対して、オリーブの木の下で悪いことはできない、オリーブの葉は家畜にやることはない、オリーブの木を勝手に切ることは大変な悪徳とされているなどという返答があった。また、上述したような Bsiysa に使うという説明や、昔はモスクへ寄進する物だったなどという説明もされた。

彼らはオリーブのモチーフを贈り物として用いることもある。彼らの家に行くときクルアーンやメッカのモチーフと同じ位置にオリーブの装飾品が飾られている場合があるし、商店でもクルアーンなどの装飾品と同じ場所で売られている(写真5)。何故オリーブがモチーフとして飾られているのかという問いかけに対して、「バラカの象徴だから」「バラカをもたらすから」などといった説明がされる。オリーブの装飾品を見ることで神の恩恵を想起することや、または恩恵をもたらすように贈与したり家の中に飾ったりしていることが理解できる。

このようにオリーブは彼らにとって何らかの豊穡さや幸福、神からの恵みといったバラカのイメージが想起されることが伺える。また、上述したように彼らの行為の中でも、オリーブが崇敬や

10) Zaïed, A. 2006. *Le monde des ksours du sud Tunisien*. Tunis: Centre de publication universitaire, p. 131.

11) 小麦、大麦、レンズマメなどの穀物の粉とオリーブオイルと少量の水を混ぜてつくるもので、聖者廟参詣、結婚式、割礼の際に食される祭事色の強い食べ物である。Véronique. P. 2003. *Tisser les relations sociales; Dans les rites et matère, représentations de l'ordre social, des valeurs et de l'appartenance à Douiret, village berbérophone du sud-est tunisien*. Thèse de doctorat, Université de Provence, p. 226. また Louis によれば、同地域では耕作や種蒔きの際には Bsiysa を土に埋め、オリーブオイルの精製作業を始める時には、一掴みの Bsiysa を投げる。Louis, A. 1975. *Tunisie du Sud; Ksars et villages de Crêtes*. Paris: Editions du Centre National de la Recherche Scientifique, p. 323.

12) 実際に参与観察で確認することはできなかったが、Zaïed によれば聖者廟の前にオイルが入っている容器があり、参詣の際にはその中に人差し指を入れることでバラカがより多く享受されるという。Zaïed, A. 2006. *Le monde des ksours du sud Tunisien*. Tunis: Centre de publication universitaire, p. 131.



写真5: クルアーンなどと並びオリーブのモチーフが売られる。奥の額の中にあるのがオリーブのモチーフ

敬愛の対象として扱われていることが理解できる。

何故そのようなオリーブに対する意味が生まれるのかという質問に対して、ほとんどの人は「クルアーンのなかで、オリーブの記述があることから」という理由を第一にあげる。クルアーンでオリーブの記述は6ヶ所に見えるが、そのなかでも24章35節¹³⁾をあげる人が多い。しかし、実際にはクルアーンの中にはナツメヤシ、イチジク、ブドウなどをはじめ、様々な果物が何回も登場する。それらの中でも彼らは、オリーブは他の植物と違い特別な存在であると述べる。その理由を尋

ねると、様々な説明が返ってきたが、ここでは紙幅の関係で彼らの説明する理由をひとつひとつを記すことができないので、それらの意見を分類し提示しておく。1点目は「食用や薬などいろいろな用途に使える」、「人間だけでなく動物も食べることができる」などといった、多様な用途と恵みの豊かさに言及することである。既に述べたように、この地域で幾多の用途を可能としている木であることや、それらが人間にも動物にも大きな恵みをもたらし生命をもたらしているという観点から説明がなされる。2点目は「死なない木である」、「寿命が長い」、「乾燥で他の木が枯れてもオリーブは緑を保つ」といったオリーブの生命力の強さに言及する説明である。普通の植物とは違う不思議さや奇妙さが主張される。また「乾燥地でも強く育つのに、人間や動物にも多大な利益をもたらす」などというように二つが関連して説明されることもある。あまり多くはない意見ではあるが、3点目には「自分たちにとって不可欠なもの」、「伝統的にずっとそれを造ってきた」などといった、自分たちの存在と照らし合わせた説明がある。

4. オリーブからバラカを考察する意義

前節では、調査地域でオリーブという木が人々の生活に密着しながら、特別な意味を持つものであり、その理由がバラカのような恵みをもたらし、生命力において不思議さや奇妙さをもった木であると説明されることを示した。また、バラカを介在するものとしてオリーブのモチーフが家の中に飾られているということも示した。ここではそうした事象を採り上げる意義について考察する。

これまで活発になされてきた「民衆のイスラーム」研究に聖者研究がある。赤堀が奇蹟と恩寵が聖者たらしめる要素として働いていると述べているように¹⁴⁾、聖者研究の中でも、奇蹟（カラーマ）と恩寵（バラカ）は聖者崇敬にとって重要な要素として考察されてきた。神の力によって通常では考えられないような奇異な出来事が起こるという要素（奇蹟）と、それを通じて人々に恵みをもたらす（恩寵）という要素である。

聖者崇敬にとって要であるこの2つの要素であるこの奇蹟と恩寵を感じる場面は、聖者だけに限られないことが、オリーブの事例からも伺えるのではないだろうか。つまり、人々が語ったオリ

13) 「アッラーは、天地の光である。かれの光を譬れば、燈を置いた、壁龕のようなものである。燈はガラスの中にある。ガラスは輝く星のよう。祝福されたオリーブの木に灯されている。(その木は) 東方(の産)でもなく、西方(の産)でもなく、この油は、火が凡んど触れないのに光を放つ。光の上に光を添える。」(Q24: 35)。訳は日本ムスリム協会編『聖クルアーン』2009のものを使用した。

14) 赤堀雅幸 2003「ムスリム民衆研究の可能性」『イスラーム地域研究の可能性』東京大学出版会、pp.29-30.

ブが特別な意味を持つ理由は、普通では考えられない不思議で奇妙な生命であること(奇蹟的要素)と、それによって人々に多大な恵みをもたらす(恩寵的要素)という2つの理由に大別された。そしてこの2つの要素は、聖者崇敬のそれと近似している。だからといって聖者に対する信仰の諸形態が、そのままオリーブへのそれと同じように働くというわけではない。しかし、何かを通じて奇蹟や恩恵を感得し、その対象に対して崇敬の念を持つという現象は、聖者以外にも同様に成立するのではないか。

バラカ概念でいえば、斉藤の次の指摘が参考になろう。すなわち、これまでのバラカ研究は、聖者との関係から研究される事が多かったが、バラカは聖者のみならずムスリムの生活全般にわたって浸透している概念である、という指摘である¹⁵⁾。聖者(人)ならずとも、木自体やモチーフとして飾られているモノもバラカを与え、バラカを介在するモノとして存在すると考えることができる。

人々が日々の生活の中で、どのように神の奇蹟や恩寵を感じるかを理解することを目的とするならば、聖者崇敬はもちろんのことながら、人ではなくモノに定位しても考察できるのではないかと考える¹⁶⁾。そうした考察が、聖者-カーマ-バラカを軸とする聖者研究に還元できるならば、「民衆のイスラーム」研究をより豊かにすることができよう。

15) 斉藤剛 2010「バラカ概念再考——モロッコをフィールドとした人類学的ムスリム聖者信仰研究の批判的検討」『イスラーム世界』74, pp.1-32.

16) Schimmel は現象学的なアプローチから、具体的なモノやコトがイスラーム世界でどのような意味を持つかの研究の可能性を示唆している。Schimmel, A. 1994. *Deciphering the Signs of God: A Phenomenological Approach to Islam*, New York: State University of New York Press.